

平成 21 年 4 月 25 日現在

研究種目：基盤研究 (C)  
 研究期間：2005～2008  
 課題番号：17520096  
 研究課題名 (和文) イタリア・ルネサンスにおける古代異教的慣習の残存をめぐる  
 歴史人類学的研究  
 研究課題名 (英文) The historical anthropology on the survival of the ancient pagan  
 traditions in the Italian Renaissance image culture  
 研究代表者  
 水野 千依 (MIZUNO CHIYORI)  
 京都造形芸術大学・芸術学部・准教授  
 研究者番号：40330055

## 研究成果の概要：

本研究は、ルネサンスの図像文化における古代異教的慣習の残存を、以下の三つの事例に即して、歴史人類学的観点から考察した。①古代異教の慣習や民間信仰を基層とするルネサンス期の終末論的預言や奇蹟の言説と図像、②ルネサンスの肖像史にみる古代異教の「祖先の像」「像による葬儀」「コンセクラティオ」の残存、③ルネサンスの像文化における奉納像 (エクス・ヴォート) の地位。いずれの成果も論文として発表するとともに、出版を予定している著書の一部にて公開する。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	900,000	0	900,000
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,300,000	480,000	3,780,000

研究分野：美術史

科研費の分科・細目：

キーワード：終末論的預言、奉納像、祖先の像 *imagines maiorum*、像による葬儀 *funus imaginarium*、皇帝神格化 *consecratio*、王の二つの身体、分身、奇蹟像

## 1. 研究開始当初の背景

若手研究 (B) 平成 14—16 年度研究課題「ルネサンスの家庭生活におけるイメージの位相研究——ロレンツォ・ロットの芸術を例に」において、15 世紀末から 16 世紀初頭、イタリア戦争や宗教改革に翻弄され疲弊したイタリアにおいて、終末論的預言や奇蹟的現象が流行し、さまざまな解釈を受けつつ共同体の声なき声として機能したことを見いだした。なかでも、そこでの図像の役割が重

大であるとともに、そうした現象の根底に、古代異教の慣習の残滓が見え隠れすることに気づいた。それは、近代美術史学の祖とされるヴァールブルクが、ルネサンスにおけるアポロンの古代の再生ではなく、ディオニソス的でデーモニックな古代の「残存」を、当時の人類学や心理学との対話のなかで見いだしていた点と結びつくものであった。さらに翻訳を手がけた G・ディディ＝ユベルマンの『残存するイメージ』は、この研究を準備する方法論的・理論的素地となった。そこか

ら、すでにイメージ人類学的視座から進めていた奉納像研究や奇蹟像の地位をめぐる研究、出産や葬祭儀礼に関わる図像の呪術性と古来の像魔術との関わりなどの研究をベースに、さらに掘り下げて、ルネサンスに残存する古代異教文化と図像との関わりを考察する視点へと導かれた。

## 2. 研究の目的

本研究は、ルネサンスの図像文化における古代異教の慣習、とりわけそのデーモニック側面の残存を示す3つの事例を中心に、歴史人類学的視点からイメージの地位を問い直すことを目的とする。

(1) 15世紀後半から16世紀初頭にかけてイタリアで流行した終末論的預言や奇蹟に注目する。こうした事象の基層には、しばしば古い異教の慣習や民間信仰が残存している。今回の研究では、それらの言説が、当時の政治・宗教的状況のなかで担ったアクチュアルな意味作用を調査するとともに、キリスト教ルネサンスが文化の古層をどのような形で同化・吸収し、機能させてきたのかを考察する。さらにそうした言説が、口承・文字（書簡、宣伝用小冊子、教皇勅書）・朗唱・図像という多様なメディアを横断していかに練り上げられ、意味を変化・増幅させながら、多様な社会層に伝達されたかを問題にする。概してこれらの言説は、匿名の一個人の幻視体験を端緒とし、そこから政治的意味を担う一大プロパガンダへと練成されていく。そのなかでも、辻演歌師が朗唱・販売した小冊子に添えられた図像や、一枚刷り木版画らしに着目し、メッセージの伝達経路のなかで、文字や言葉に対して図像というメディアがいかなる特殊性を孕み、どのような役割を担ったのかを問うとともに、それらの図像と芸術作品の図像との関係をルネサンス文化のなかで見定めていくことを目的とする。

(2) ルネサンスに再興する個人の肖像、とくに対象の痕跡（デスマスク、ライフマスク）に基づく肖像の存在に注目し、ルネサンス肖像史におけるその地位と機能を考察する。そこから、古代異教の「祖先の像」や「像による葬儀」、帝政期ローマの「皇帝神格化」の儀礼などとの紐帯が想像されるが、その関連性を歴史的に跡づけるとともに、この種の特異な肖像の機能を、「分身」や「王の二つの身体」をめぐる理論を参照しながら掘り下げる。さらに、像による栄光化とは対極の、像による処刑や名誉毀損といった現象にも目を向ける。

(3) 像の呪術性という点で奉納像（ex voto）に着目する。ルネサンス期には、身体各部位を象った解剖学的奉納物から、等身大の全身奉納像にいたるまで、奇蹟を起こすという伝

承のある聖像に数多くの奉納物が献納された。古代の人身供儀に淵源をもつと考えられるこの慣習にも、イメージによる類感呪術の残存を見ることができるとともに、古代の医神アスクレピオス崇拝において流行した像の奉納と並んで、「インクバティオ（お籠り）」などの崇拜的身ぶりのルネサンス期における残存も合わせて考察する。さらに、奉納像も名誉と不名誉のあいだを揺れ動いた肖像であり、生身の身体以上の象徴性を付与され、栄光化の手段ともなれば、処罰や冒瀆の対象ともなった現象も掘り下げる。

## 3. 研究の方法

初年度は、研究目的の①の課題に集中し、15世紀後半から16世紀初頭にかけて、イタリアで流行した終末論的預言や幻視の言説（日記、年代記、書簡、小冊子、手稿本、初期刊本…）と図像（木版ちらし絵、挿絵、ポスター、芸術作品…）を包括的に収集し、当時の錯綜する宗教的情勢のなかで、それらが生み出された背景や機能したメカニズムを考察する。奇蹟的伝承は数多く存在するため、主として以下の3つの例に絞って調査を試みる。

① 占星術にもとづいて1524年に第2の世界洪水が起こるとした終末論的預言。

② 各地で誕生したとされる畸形の動物や子供の誕生をめぐる言説と図像。

③ 1517年頃、北イタリアのベルガモ近郊ヴェルデッロでみられた集合的幻視、すなわち堆肥から立ち昇る靄のなか、天空で激しく闘争する兵士たちの幻視。

いずれも古代から危機的状況においてしばしば持ち出される奇蹟や幻視が、このルネサンスの一時期にふたたび人々に注目され、トラウマ的状況において集団の声なき声となったり、プロパガンダ的に利用された様を分析する。

平成18年度は、研究目的の②に着手する。ルネサンスの肖像制作における型取技法を、デスマスクやライフマスクの利用を中心に調査するとともに、そうした技法を援用した古代の肖像との関わりを、一次史料の読解を通じて考察する。プリニウスやポリュビオスには、蠟などで型取りした肖像が、「祖先の像」「像による葬儀」「皇帝神格化」に利用されていたことを伝えており、また中世末以降、イングランドやフランスでも国王の葬儀に蠟製型取肖像が象徴的に導入された。そうした像の機能がルネサンスの型取肖像にも見いだせるかどうかを調べるとともに、それぞれの系譜学的連続性を問いなおす。さらに、これらの儀礼に共通する像の持つ「分身」としての機能を掘り下げる。奉納像についても、とくにフィレンツェとマントヴァの事例を

中心に、一次史料の読解と残存作例の調査に基づき、歴史人類学的視座からその地位や機能を考察する。

最終年度は、上記のケース・スタディを最終的段階まで押し進め、著書としてまとめる。

#### 4. 研究成果

本研究は、ルネサンスの図像文化における古代異教的要素の残存を、(1)終末論的予言や奇蹟、(2)古代異教の「祖先の像」「像による葬儀」の残存、(3)奉納像 という3つの事例に即して歴史人類学的に考察を試みた。

(1) イタリア戦争や宗教改革にイタリアが苦しんだ時期、各地で誕生が報じられた「怪物」に予言的「徴候」をみる態度がいかに流行したか、怪物の形態学に寓意像や記憶術的イメージの伝統がいかに影響を及ぼしたかを考察し、論文とした。古代の予言文化に鼓舞された高い文化的階層が、民衆的想像力に由来するかに見える文化的要素をいかにブリコラージュしプロパガンダ的言語として利用したかを考察した。

さらに、奇蹟像とその「力」のコントロールという視点から、ルネサンス期の修復的介入が果たした機能について、ルネサンスの画家ネーリ・ディ・ピッチの工房記録『覚書 (Le Ricordanze)』をもとに考察し、論文とした。

(2) ルネサンス肖像史のなかでも、とくに対象の痕跡に由来するインデックス的肖像に目を向け、その地位と機能を再考した。とくに、古代の「祖先の像 (imagines maiorum)」、  
「像による葬儀 funus imaginarium」、  
「皇帝神格化 consecratio」など、死者の「分身」たる肖像の周りで繰り広げられた儀礼がルネサンスにいかに残存したのかを調べ、とくにフェッラーラ、フィレンツェ、ヴェネツィア、マントヴァ、ミラノに、散発的にはあるが肖像による葬儀が挙行されたことを明らかにした。カントーロヴィチが中世末以降イングランドやフランスで展開した国王の「像による葬儀」をめぐって提起した「王の二つの身体」、ギンスブルクの「表象」論、アガンベンの「ホモ・サケル」論などの理論も参照しながら、イタリアの事例におけるその象徴性についても洞察した。死者を代理表象したり、その身体を二重化する肖像の機能、さらに、肖像による栄光化と名誉毀損、称揚と処刑、記憶の形成と抹消など、可塑的に機能が反転する側面にも注目し、生身の身体に対する肖像の身体の意味、余剰性を再考した。

(3) 奉納像についての研究成果の一部は、「田園の聖母」にまつわる論文のなかで論じるとともに、(2)と合わせて、出版を予定している著書の一部として現在執筆を進めている。

今回、とりあげた研究事例は、従来「美術

史」という分野の主流においては等閑に付され、むしろ歴史学や文化人類学の分野で扱われてきた。しかし「美術史」が悪魔祓いし沈黙してきた領域に目を向け、特に像がある文化において担っていた機能や効力、地位を問うことは、ルネサンスにおけるイメージ文化の多元性を照射することにつながるとともに、美術史そのものの可能性を探る方法論的意義もそなえている。

(1)の予言・奇蹟の言説や図像については、主に歴史学において、C・ヴァージーリ、R・ルスコーニ、C・ギンスブルクらの名高い研究があり、とりわけO・ニコリは、異なる社会層に応じた予言の伝達経路や、ちらし絵や廉価版小冊子の図像にも目を向けた研究を展開している。またルターの時代のイメージ戦略と民衆文化との関係については、ドイツで旺盛な歴史研究が展開されている。しかし美術史においては、概してこれらの題材は研究対象として捉えられることさえ稀である。本研究では、メディア論、ニュー・ヒストリー、歴史人類学、ジェンダー論などと問題圏域を共有することで、イメージを理解する新たな方法を探ることにむしろ照準を定めた。

(2)、(3)の事例は、A・ヴァールブルクの慧眼による今なお示唆に富む研究がある。

「イコノロジーの父」と目されながらも実質的には美術史のなかで忘却されてきた彼の数々の功績は、現在、世界的に再評価される傾向にある。申請者が翻訳に携わったG・ディディ＝ユベルマンは、その流れを代表する一人であり、本研究もその態度を共有している。ヴァールブルクが見抜いた蠟製肖像とルネサンスの写実肖像との関係や像の魔術的効力については、J・フォン・シュロッサーの研究に敷衍されたものの、そこに含まれるさまざまな問題は十分に論じ尽くされているとは言いがたい。近年、ようやく奇蹟像をめぐる歴史人類学的研究や、奉納像や蠟製肖像を多角的に論じる書物の出版、展覧会の開催がみられはじめており、本研究はそうした動向と歩を一にしつつ、今後の美術史の方法論的可能性を批判的に検証するものである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

水野千依「〈田園の聖母〉の幻視——十六世紀イタリアの田園文化と聖母信仰をめぐる一考察」『芸術学研究』、査読無、第2巻、2008年、1～63ページ

水野千依「〈徴候〉としての怪物——ルネサンスにおける予言文化と図像」『京都造形芸

術大学紀要(GENESIS)』、査読無、第12号、2008年、153～169ページ

水野千依「ルネサンスの芸術家工房——ネーリ・デイ・ピッチの『覚書 (Le Ricordanze)』から」『ジョットとその遺産展』、査読無、2008年、107～117ページ

水野千依「イメージの活性化／無効化をめぐる身ぶりの諸相——中世からルネサンスにおけるイメージの力学」『イタリアにおける美術作品の保存・修復の思想と歴史——欧米各国との比較から』(平成15～18年度科学研究費補助金(基礎研究(B)(2)研究課題番号15401007 研究代表者:岡田温司)、査読無、2007年、130～160ページ

水野千依「『健やかなる男児』と『怪物』の誕生——イタリア・ルネサンスの出産装飾にみるイメージの「力」——」『AUBE——比較芸術学』、査読無、第2巻、2007年、93-114ページ

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計4件)

石鍋真澄監修、水野千依ほか共著、小学館、『ルネサンス美術館』、2008年、120～121、378～379、464～485ページ

ブルーノ・サンティ、小佐野重利、水野千依ほか共著、アートプランニング レイ、『ジョットとその遺産展』(展覧会カタログ:責任編集) 2008年、総ページ数152ページ

エリー・フォール著、谷川渥、水野千依共同訳、国書刊行会、『美術史 近代美術I』2008年、総364ページ

谷川渥、水野千依ほか共著、日本文教出版、『絵画の制作学』、2007年、128-139ページ

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

〔翻訳論文〕(計3件)

ゲアハルト・ヴォルフ著、水野千依単訳「真のイメージ—ビザンティウムから西方までのキリストの顔」(単訳)『AUBE——比較芸術学』淡交社、第3号、2008年、pp. 90-115

アントニオ・ナターリ著、水野千依単訳「レオナルドの時代のヴェロッキオ工房におけるペルジーノ——レオナルドの《受胎告知》を中心に」(単訳)『文化交流研究』東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要、2008年第21号、pp. 69-94

ゲアハルト・ヴォルフ著、水野千依単訳「聖遺物、聖像、聖地——キリスト教文化における生者と死者、天と地のコンタクト・ゾーン」『文化交流研究』東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要、第20号、2007年、pp. 61-94

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

水野 千依 (MIZUNO CHIYORI)  
京都造形芸術大学・芸術学部・准教授  
研究者番号: 40330055

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし